

Newsletter



附属学校ニュースレター

第24号・2017年3月10日

研究開発公開研究会（幼稚園・小学校）

平成28年11月19日（土）に、文部科学省研究開発学校公開研究会（二年次）を、幼稚園小学校合同で開催しました。

—研究開発課題—

幼小一貫教育において生活と学習をつなぎ、同年齢や異年齢で協働的に探究を深め、多様な能力や個性的な才能を引き出す「生活学習力」を育成する教育課程の研究開発

この公開研究会は、小学校の学習研究集会、附属幼稚園としての公開保育研究会も兼ねて開催しました。

—学習研究集会主題—

自律的に学ぶ子どもを育てる「奈良の学習法」とアクティブラーニング
～個の探究と相互の探究をつなぐ
「生活学習力」を育てる～

—公開保育研究会主題—

自ら遊びをつくりだす子どもを育てる
～子どもの「生活」を丁寧にみとる保育～

当日は、「奈良の学習法」による学習及び附属幼稚園の保育の公開と、研究開発の取り組みとして異年齢による活動「なかよし探究」の公開をしました。午後からは、それぞれの学習や保育と「なかよし探究」「なかよしタイム（幼3歳～5歳）」・「なかよしひろば（幼5歳・小1～2年）」・「なかよしラボ（小3～6年）」の協議会をもちました。

協議会では、小学校の「奈良の学習法」に基づく実践は、独自一相互一独自の学習展開が大切であることを確認し

ました。幼稚園の生活や遊びの中での子どもの学びについて丁寧にみとる大切さを話し合いました。

また、「なかよしタイム」の協議会では、通常とは異なる友だち、教師、空間（場所）、教材などの異文化の中で「共同生活」や「協同活動」を行うことを考え合いました。指導助言の松澤淳一先生（奈良女子大学）からは、子どもの遊びがあらゆる教育の分野につながることを解説いただきました。「なかよしひろば」の協議会では、「あそび」の追究をどのように進めるかを意見交流し、「あそび」の追究を楽しむことが、高学年での「なかよしラボ」へとつながり、「生活学習力」が育まれていくことを話題にしました。指導助言の富士原紀絵先生（お茶の水女子大学）からは、異年齢活動の中で様々な立場に立つことによる学びについてお話いただきました。「なかよしラボ」の協議会では、自分の生活とかかわったテーマ設定、個人の追究と相互の追究につながりを課題として実践を続けてきたことを伝えました。指導助言の奈須正裕先生（上智大学）からは、小学校が伝統的に取り組んできた「自由研究」と「なかよし」の流れを融合して、発展的に進めようとしているところにその意義があるとお話いただきました。

最後に、西岡加名恵先生（京都大学）に『「資質・能力」を育てるカリキュラムをどうつくるか ―パフォーマンス評価の視点から―』の演題で、ご講演をいただきました。当日の子どもの学習・活動の意味、カリキュラム上の位置づけやそこで行われている評価の実際について、写真とエピソードを示しながらお話していただき、私たち自身も研究の取り組みの新たな意味に気づかされ、実りある研究会になりました。





学習研究発表会

附属小学校

平成29年2月10日(金)11日(土)の二日間にわたり、附属小学校の学習研究発表会を開催しました。昨年度から研究主題を、自律的に学ぶ子どもを育てる「奈良の学習法」とアクティブラーニング～個の探究と相互の探究をつなぐ「生活学習力」を育てる～とし、次期学習指導要領のキーワードともなるアクティブ・ラーニングに焦点をあてた研究会としています。

学習研究発表会一日目は、公開学習①②で全教員が学習を公開し、その後の協議会を通して「自律的に学ぶ子どもを育てる」ことについての協議を行いました。午後からの全体会では、本校教諭阪本・豊田・清水の3名による鼎談を行いました。主体的・対話的・深い学びをつくるための「個の学び」を話題の中心として、実践をもとに語り合いました。

二日目は、公開学習③④で全教員が学習を公開し、教科ごとにアクティブ・ラーニングについての協議会を行いました。午後からの全体会では、アクティブ・ラーニングについてのパネルディスカッションを行いました。同志社女子大学の吉永先生の進行により、お招きした和歌山市の公立小学校・関西大学初等部のアクティブ・ラーニング実践者と本校教諭杉澤が、「アクティブな思考、個の学びの充実、学びの自覚化」をキーワードに考え合いました。

その後、お茶の水女子大学の富士原紀絵先生に「自ら学ぶ子どもを育てる学校づくりー過去と現在の実践の示すことー」との演題で、学習法の歴史にも触れたご講演をいただきました。

公開研究会 & SSH研究成果発表会

附属中等教育学校

去る2月17～18日に、公開研究会 & SSH研究成果発表会を開催した。

17日は、理数融合授業の公開を含む理数シンポジウムと社会科・国語科・創作科(音楽)・英語科・保健体育科の公開授業および研究協議がもたれた。

理数融合授業「光は進むべきルートがわかるのか？」

～数学化を通した科学概念の本質的理解を目指して(5年物理)～

国語「『従来型授業』はアクティブではないのか

ー土佐日記「帰京」を題材に(4年国語総合)ー

社会「シミュレーション教材『遊牧民ゲーム』を用いたアクティブラーニングの試み(5年地理)」

創作・音楽「図形楽譜づくりを通した《魔王》の鑑賞(1年)」

英語「Introductory Englishにおける習得と探究

(2年Introductory English)」

体育「攻防の面白さを楽しむ剣道の授業(1年女子)」

など、近年耳にすることの多い「アクティブラーニング」を念頭におきつつ、それにとどまらない問題提起性を含んだ挑戦的な授業を各教科とも展開した。研究協議においても、活発な意見交換がなされ、実りある研究会だったと言えよう。

翌18日は「Zone」と称する分科会を3つ(理数融合授業体験ワークショップ、プログラミング「教育」の教育的意義、若手教師の語り場)および同時並行でサイエンス研究会生徒のポスター発表会がもたれた。ここでも前日に続いて、参加者からは「意欲的な取り組みが随所で見られて大いに勉強になった」など好評であった。

「本校文化」の発展的継承を

一附属中等教育学校を去るにあたって一

附属中等教育学校副校長 武田 章

本校赴任以来すでに約30年が経ちました。まさに「光陰矢の如し」です。赴任した頃を振り返ると、教員集団は「戦国大名が乱立してるみたい」で、生徒諸君は当時高3だった八嶋智人君を筆頭に皆個性豊かでした。そして「自由な雰囲気」が漂っており「自分の体質に合うてるな」という印象でした。

昨今「附属の生き残り」が喧しいですが、赴任した頃にもすでによく耳にしていました。本校では1987年から「公開研究会」が始まり、積極的に本校教育の対外発信をしていこうという姿勢になりました。また同じ頃から「新しい中高一貫カリキュラムや授業の創造」などをテーマとして文部省の研究指定を受け始めます。これらは現在のSSHにつながる「附属の存在意義主張の一環」といえます。

「総合学習」も、そのなかで全国に先んじて実施されていきました。複数教科の教員が共同して一つの授業を創りあげていくという中学高校においてはあまり例のないものでした。試行錯誤しながらそのような新しい課題に取り組んでいくことは、若かりし私にとってワクワクする作業でした。「奈良学」や「環境学」は、それなりに全国的に有名になり、学校訪問も増えていきました。また公開研究会参加教科も徐々に増え、「教育研究」という国立大学附属学校本来の使命がより明確な形で示されるようになっていきました。

個人的には、赴任当初から歴史教育者協議会という民間の社会科教育研究団体に所属して、新しい視点からの授業づくりを行っていました。そこには県内の小中高の教員が集い、夜遅くまで議論を重ねて創った授業を参観しあい批判しあうという刺激的な「授業道場」ともいうべき場でした。その成果を毎年のように全国大会等で報告することを通じて、全国のすぐれた授業実践者・教育者と知り合うなど、「教師武田章」を形成するうえで大きな意味を持ちました。1999年に全国大会を奈良で開催した際の事務

局長を務め、成功裡に終えられたことは終生忘れることはないでしょう。そのような機会を与えてもらったことは感謝に堪えません。

そのように教員として育っていく中で「自分の存在意義は何か」をよく自問しました。たどり着いた答えは「将来の主権者をしっかりと育てる」という特に目新しいこともない当たり前のことでした。授業をはじめとする日々の教育活動はすべてそれにつながると考えて過ごしてきたように思います。

日本でも18歳選挙制度が導入されましたが、私は6年(高3)生には必ず「選挙には必ず行きなさい。投票対象が決められないときには白票を投じに投票所に足を運びなさい」「権利の上に眠る者はいずれその権利を失うのだ」という言葉を贈ってきました。これからも出来るだけ高い意識を持って社会参加していく卒業生を本校が送り出していくことを切に願います。

2010年に本校は創立百周年を迎え、私は「本校百年史」の編纂にも携わりました。その作業を通じて、本校教員は各時代において、将来を見据えながらあるべき教育の姿を真摯に考えつつ、自由な発想で日々の教育活動にあたり、それは現在も受け継がれていることを強く感じました。それは将来にわたって本校の貴重な「文化」として継承され、益々発展していくことと信じます。そして、そのような場に長きにわたって存在できたことのしあわせを心から喜びたいと思います。





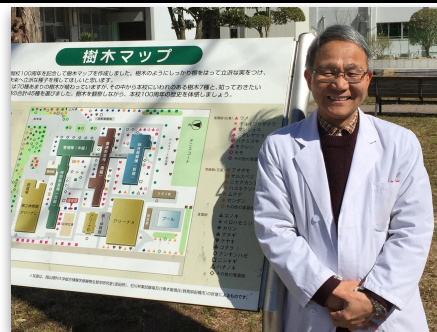
こぎつね研究室

附属幼稚園



附属小学校栄養教諭

太田原みどり



附属中・高校から中等教育学校へ
一私が勤務した34年間、そして未来へ

附属中等教育学校 矢野 幸洋

今年度、附属幼稚園に初の男性の先生が誕生した。「きつね先生」こと谷岡義高先生である。1学期の始業式でのあいさつで、「『谷岡きつね』と言います。」と自己紹介された瞬間に、園児のハートはつかまれた。鮮烈な幼稚園デビューである。

研究室と称しながら、残念なことに部屋はなく、研究準備室の前の廊下に机を数個並べ看板を掲げて、「こぎつね研究室」はある。その場所にいつも谷岡先生がいて、毎日園児と虫取りや花摘みをし、それらの虫や花などの名前を調べて、虫や小動物の飼育をして、毎日園児が触ったり見たりできるようにしている。教師生活32年間で初めて附属幼稚園でトノサマガエルが生息していることがわかった。プランターの下に冬眠していたのだ。カエルもきつね先生を迎えてくれたのだ。

園児の興味は尽きない。一方ですぐに興味は薄れる。スマートフォンやタブレットで調べられるけれど、園児が実際に遊びながら得る気づきや疑問、不思議と思うことに丁寧にことごとく付き合ってくれるきつね先生が傍にすることで、園児の興味は持続し、体の奥底の方で大切に温められ、いずれ日本の、いや世界をけん引する科学者が育つに違いない。

副園長 飯島貴子

附属小学校の二代目学校栄養職員として給食に携わり、十数年が過ぎようとしています。平成17年に食育基本法が施行され、栄養教諭として学校給食管理と、子どもたちと食の学習も行うようになりました。

著書「わが校百年の教育」の中で本校の給食の歴史を調べてみると、昭和19年10月24日より学校給食が始まったとの記述がありました。現在までに約73年の歴史が続いています。その歴史の約1/4に私が携わっており、その給食を食べて育った子どもたちがいると思うと、改めて貴重な仕事をさせていただいているのだと思います。

給食の献立も徐々に変わってきています。現在、本校の給食には、子どもたちが暮らしている奈良の食文化を感じられるように郷土食や地域で収穫された食材を取り入れています。食への興味関心を高めたいと考え、子どもが給食に関わる機会を作るようにしています。その1つとして、毎年1月の学校給食週間には、家庭科学習と連携し、6年生が考えた給食献立を実施しています。各学級のこだわりや工夫があり、お楽しみ給食となっています。

これからも、給食を足場にしながら、子どもたちと共に食の知識や経験を広げていきたいと思っています。

【写真：「奈良を味わう」郷土食献立】

まず、先生方と生徒に支えられここまで無事にやってこられたことに感謝します。

さて、私が勤務した34年間は概ね3つの時期に分かれます。附属の古き良き時代の一部が残る頃、「教育研究」に加えて中等教育学校を看板にした頃、そして大学法人化とSSHの指定を受けた頃から現在までです。

私が赴任した1983年頃は、授業がない研究日が週に1日設定され、先生方は研究重視でした。しかし、生徒の学力格差が開き、生徒指導事案も多くなっていました。中学校の入学試験は抽選制が実施され、本校第一志望の生徒が抽選に落ちて去る一方で、附属小学校からは毎年50名が入学できるという状況でした。

その後、公開研究会が軌道にのり、研究指定も継続する中、2000年に中等教育学校と看板を変え、それに伴い定員増、新棟の建設と飛躍の年となりました。

2004年国立大学が法人化され、文学部附属から全学附属になり附属学校園として再出発することとなりました。附属小との関係も改善され、今後は、独自の校風を大切にしつつ、一つの学校園としての取組と成果が期待されます。一方、SSHの指定により、備品関係は充実しましたが、「生徒の育成」という今まで以上の真摯な取り組みも要求されます。これらの課題解決のための手立ては動き始めています。

今後、附属校園どうしが切磋琢磨し、益々発展することを心より祈念します。